

<可部の地名のいわれ>

律令制のころ、税を徴収する単位を郷といい、可部のあたりは「漢弁（かべ）郷」といわれていたことに由来します。

①家畜獣魂碑

福王寺参道入口バス停奥に自然石の碑がある。すぐ横を帆待川が流れている。その畔で牛馬市は宝暦4年（1754年）頃開かれていたと思われる。



写真は牛神さん

②天王さん

文政2年（1819年）上四日市村の庄屋が記した文書に「ご神体は牛頭天王と申し白い石一つ」とあるが、現在は石と鏡の2体が安置されている。



③河戸の杉薬師（医王寺）

真言宗。ご本尊は薬師如来。広島新四国八十八ヶ所霊場の第20番。



④藤の森地蔵

太田川土手の畔に地蔵堂がある。正面左側の台座に「天下和順、奉納大乘妙典六十六部供養塔」とある。建立は寛政12年（1800年）。約200年前にこの地に来て奉納したと推測される。

可部の散歩

5

可部地区の名勝・旧跡めぐり

✿まちのかくれたお宝さがし✿

ぐるっと巡って1時間半のコース(約5km)

⑤牛神さん

丸い野井戸が敷石となっているこの祠は石地蔵が祀られ、地元の人達から「牛神さん」と慕われている。

昔、牛市があった頃、そこから逃げた牛がこの井戸に落ちて死に、その後も牛が病気で次々死んだので、地蔵を祀ったとの話もある。



⑥千代の松

広島市指定の天然記念物。明治末期には「可部八景」の一つに選ばれていた。



写真は藤の森地蔵と千代の松

⑦友貞神社

ご神体は市杵島姫命。上中野村の八幡宮在だった。下の浜明神社と渡御、還御の行列（笛や鉦、太鼓囃子）など賑々しく供奉した。

⑧上市のお地蔵さん

昔は8月24日の祭日には2mあまりの「大」の文字の土盛り（高さ15cm）を人体になぞらえ、己の悪い部分に線香を立ててお地蔵さんをお願いをした。夏の風物詩であった。



写真は上市のお地蔵さんと友貞神社

⑨稲荷神社

ご神体は倉稲魂命。農耕の神、稲荷（ダキニ天）信仰と習合し境内前に牛馬市場があり商人も参拝し繁盛した。



⑩上中毘沙門堂

享保8年（1723年）、今から約300年前の建立で、本尊の毘沙門天像は、厚さ12cmの台座の上に赤青の邪鬼を足蹴に立っている。

⑪上中尾又神社

⑩と同じ境内にある。神名を記した幣の正面中央に奉鎮座牛頭天王、その右側に安芸の国高宮郡稲田姫命、左側に普門寺子孫である。



写真は上中毘沙門堂と上中尾又神社

可部の地名と風物詩

和名抄によると、安芸の国は次の八郡に分かれていた（沼田、賀茂、安芸、佐伯、山県、高宮、高田、沙田ますだ）。これが中古に至り安芸郡を分けて南を安南郡（現在の安芸郡）北を安北郡（後の高宮郡）。当時可部は安北郡に属していた。寛永十五年（一六三八年）の地誌帳には（安芸国安北郡可部町）とはっきり呼称されている。

話変わって、広島藩侯浅野齊賢の藩内巡察の時随行した際の頼杏坪作歌を紹介すると

雲かかる峰のふる寺

たづねきて

ちさとのほまの

石を見るなり

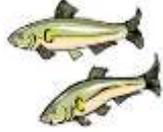
石とは紀州千里の浜より持ち帰った高さ一尺三寸、長さ二尺八寸の福王寺に伝わる「ざざれ石」のことである。

さらに、頼杏坪著「稲むしろ」より抜粋の歌も紹介する。

くたりやなとく打ちてけり

はや川のみつぎの鮎を

いそぐむらびと



「今宵は可部といふ里にやどり給う、鶺鴒かふわざなど見給へる」と言つて、太田川で鶺鴒を見たとときの詩境をうたったものである。上納品調（しらべ）の鮎をとる。大やなを見たまふに、川の左右より、石をたたみて流れをさへぎり、中なる空し所に、竹をしがらみて落ち鮎をとる。その営みたくましく、よき見ものなりけり。当時の太田川の風物詩を表現していて、誠にゆかしい情景である。

「願すことば」で有名な願船坊 ～ まるで早口言葉です。街道を行き交った旅人へ地元民が返したのでしょうか。

可部の願船坊にゃ 聴聞が願すか 願船か 願しゃ願すと話が願しようが 願船けえ 願船のがんしようて

(可部の願船坊には お説教が あるのでしょうか ないのでしょうか あれば話がありましようが ありませんので ないでしょう)

★願船坊ホームページより引用★

可部町を中心に伝承されている諺（ことわざ）



むかしの太田川橋

◇屏風（びょうぶ）と商売人は曲がらなければ立たぬ。
（商売人は腰を低く、頭をたれよ）

◇両方ええのは、ほおかむり、それでもコブがある。
（四方八方うまくいく事はない）

◇宮の下の小僧。

（お参りする姿を見てばかりいては上がれない）

◇かね萬の葬式で日が暮れる。

（仕事が長引いて日が暮れる事）

◇福王寺のシダのように育て。

（裏表のない人間になれ）

◇牛蒡（ごぼう）の頭までさらえる。

（長尻の客・食べ、いやしい人間の事）

火の用心！可部の火伏せのお・は・な・し

享保五年（一七二〇年）の大
火災より大小火事あり、火伏地蔵が行方不明の間、火災が多く発生していた。上ケ原の某家にあることがわかり、事情を話して持ち帰り、以後火事がなくなつたと伝わっている。現在は尾又神社の祭神の横で鎮座している。いつ習合したかは不明。

高松神社（昔は愛宕社）は火伏の神（火之迎具土神）、京都の愛宕神社の分霊を祀っている。

この神社にゆかりの熊谷氏の話で、高松城、城主二階堂氏を熊谷直時が攻略し、その後、直経に至って本居城としたという説があるが、熊谷家古文書には、元直の子の信直が伊勢が坪城から移つたとしている。文化十四年（一八一七年）の下町屋村御山野毛上改帳によると城主直時公より申し伝うところとして高松城は本丸（縦三〇間、横二〇間）、以下、二の丸、三の丸、与助の丸、馬場、かぶとの丸の広さが記載されており、高松山には（谷が坊寺・明覚寺・観音寺・鐘の段）愛宕社堂宇があつたとある。